

貯法：気密容器、室温保存
使用期限：ラベル等に記載

承認番号	(57AM)380
薬価収載	1982年4月
販売開始	1982年5月

【禁忌(次の患者には投与しないこと)】

本剤又はピラゾロン系化合物(スルピリン等)に対し、過敏症の既往歴のある患者

【組成・性状】

1. 組成

本剤1g中、日局イソプロピルアンチピリン1gを含む。

2. 製剤の性状

本剤は白色の結晶又は結晶性の粉末で、においはなく、味はわずかに苦い。

本剤は酢酸(100)に極めて溶けやすく、エタノール(95)又はアセトンに溶けやすく、ジエチルエーテルにやや溶けやすく、水に溶けにくい。

【効能・効果】

解熱鎮痛薬の調剤に用いる。

【用法・用量】

解熱鎮痛薬の調剤に用いる。

【使用上の注意】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- 本人または両親・兄弟が他の薬物に対するアレルギー、蕁麻疹、気管支喘息、アレルギー性鼻炎又は食物アレルギー等の患者
- 肝又は腎障害のある患者〔症状が悪化するおそれがある。〕
- 血液障害(貧血、白血球減少等)のある患者〔症状が悪化するおそれがある。〕

2. 重要な基本的注意

- 過敏症状を予測するため、十分な問診を行うこと。
- 原則として長期投与を避けること。

3. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

(1)重大な副作用

- ショック(0.1%未満)：ショック症状があらわれることがあるので観察を十分に行い、胸内苦悶、血圧低下、顔面蒼白、脈拍異常、呼吸困難等の症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell症候群)(0.1%未満)：これらの副作用があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 再生不良性貧血、無顆粒細胞症(0.1%未満)：これらの副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 黄疸(0.1%未満)：黄疸があらわれることがあるので、このような場合には投与を中止すること。

(2)その他の注意

種類\頻度	0.1~5%未満	0.1%未満
過敏症	発疹・紅斑、浮腫、小疱性角膜炎、結膜炎、瘙痒等	
血液		貧血、血小板減少等
肝臓		AST(GOT)上昇、ALT(GPT)上昇、ALPの上昇等
腎臓		腎障害
消化器	胃痛、食欲不振、悪心・嘔吐、下痢等	
その他	頭痛	

上記の副作用が現われることがあるので、異常が認められた場合には必要に応じて中止するなど適切な処置を行うこと。

4. 高齢者への投与

一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。

5. 妊婦への投与

(1)動物実験で催奇作用が報告されているので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には投与しないことが望ましい。

(2)妊娠末期のラットに投与した実験で、弱い胎仔の動脈管収縮が報告されている。

6. その他の注意

非ステロイド性消炎鎮痛剤を長期間投与されている女性において一時的な不妊が認められたとの報告がある。

【薬物動態】

本剤をヒトに経口投与すると消化管から速やかに吸収され、1~2時間後に血中濃度は最高となり、効果は4~6時間前後で最大となる。持続時間はアミノピリンより長い。1時間に6%ずつ血中から消失し、主な尿中代謝体は脱メチル体のエノール型グルクロン酸抱合体で総尿中代謝物の約80%を占める。250mg投与の健常被検者の24時間尿中に、投与量の0.8%の代謝物及び0.04%の未変化体が認められる。

【薬効薬理】

アンチピリン、アミノピリンとほぼ同様な解熱鎮痛作用を持つ。本剤は単品としての特色は少なく、他の鎮痛、解熱、消炎、各薬剤などと配合したときの臨床効果が大きいといわれている。

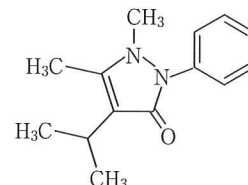
【有効成分に関する理化学的知見】

一般名：イソプロピルアンチピリン

化学名：1,5-Dimethyl-4-(1-methylethyl)-2-phenyl-1,2-dihydro-3H-pyrazol-3-one

分子式：C₁₄H₁₈N₂O

構造式：



分子量：230.31

【包装】

500g

【主要文献】

- 日本公定書協会：第15改正 日本薬局方解説書 C-453 広川書店(2006)
- 大阪府病院薬剤師会：医薬品要覧 80 薬業時報社(1976)
- Fromherz, K. J. Pharmacol. Exp. Ther. 61 (3) 205 (1937)
- Sioufi, A., Sandrenan, N., Pommer, F.: J. Chromatogr 29 (19) 2705 (1980)
- 門間和夫、竹内東光：小児科の進歩 2、95(1983)
- 門間和夫 他：日本新生児学会雑誌 20(3)508(1984)

【文献請求先】

吉田製薬株式会社 学術部

〒164-0011 東京都中野区中央5-1-10

TEL 03-3381-2004

FAX 03-3381-7728

製造販売元



吉田製薬株式会社

埼玉県狭山市南入曽951